

川上ダムについて：第76回委員会（4月9日）での議論のために

平成20年4月8日

寶 馨

木津川流域に既に存在する5つのダム（布目川筋の布目ダム、名張川筋の高山ダムとその上流に並列に存在する室生、青蓮寺、比奈知ダム）、そして、名張川より上流で木津川本川筋に位置する川上ダム。これら3つの川筋に必ずしも一様に降るわけではない雨とそれによってもたらされる水資源・洪水・土砂を、近い範囲に存在する6つのダムを統合的に管理することにより、良い効果を上げることが期待できる。すなわち、これら6つのダムをセットで考え木津川ダム群が完成する。

治水効果：

- 上野遊水地（周囲堤完成）と川上ダム（事業途中）は治水の観点からセットで構想されたものであり、ダム直下での洪水被害の防止・軽減のみならず、遊水地や岩倉狭窄部への洪水の負荷を下げる意味でも、このダムの治水の観点からの重要性が言える。
- 当然のことながら、ダム直下及び木津川から淀川にかけて流量・水位の低減効果がある。
- 計画規模洪水（S47年台風20号×1.53倍）に対して、ダム直下から淀川河口まで110kmにわたって水位が低下するシミュレーション結果が示されている（添付図1、第74回委員会（H20.3.11）審議参考資料1）。淀川本川において約25cm、木津川下流で約40cm、木津上流で60cm～120cmの水位低下効果がある。
- 戦後最大洪水（S28年台風13号×1.00倍）に対しても、淀川本川、木津川の両方において計画高水位より低い水位になっている（添付図2、第69回委員会（H19.12.26）審議資料1-4, p. 28 下段及び p. 29 下段）。

利水効果：

以下のような最近の動向であり、ダムからの利水について地元の要望が存在する。

- 淀川水系流域委員会が提示した建設中の川上ダムからの取水を大阪市の水利権転用で代替する案に絡み、委員会の宮本委員長らが13日、平松・大阪市長を訪ね、案を説明したが、市長は返事を保留した（2008.02.14 毎日新聞社・地方版／三重）
- 淀川水系流域委員会が提案していたダムの水利権転用案に絡み、平松大阪市長は5日、大阪市が保有する青蓮寺ダムの水利権について、「市民の貴重な財産であり、引き続き保有したい」との考えを表明した（2008.03.06 毎日新聞社・地方版／三重）

- 伊賀市長が、伊賀市議会 3 月定例会の一般質問に対する答弁で、「伊賀市の水道水は現在暫定水利権で取水している。これは永久ではない。いずれ安全、安心な水源が必要であり、伊賀市は川上ダムの水を必要としている。」との答弁を行った [川上副委員長ご提供 2008.04.05 伊和新聞 による]

河川環境：

- (1) アセットマネジメント（土砂管理のための新しい試み）については、ダム群が近接するというこの木津川流域ならではの特徴を生かして試みる価値はある。ただし、土砂のダム流域における生産、ダムへの流入など、もう少しシミュレーションを繰り返す必要がある。
- (2) 川上ダムのホームページ <http://www.water.go.jp/kansai/kawakami/index.htm> 及びダム便覧 http://wwwsoc.nii.ac.jp/jdf/Dambinran/binran/All/All_1333.html には、河川環境に関する以下のような最近の委員会関係記事・記録がある。すなわち、川上ダム自然環境保全委員会が 6 回、川上ダム希少猛禽類保全検討会が 7 回、川上ダムオオサンショウウオ調査・保全検討委員会が 1 2 回、それぞれ審議を繰り返しており、これらについて、淀川水系流域委員各位の考えを聞きたい。

- 水資源機構川上ダム建設所で 2 4 日、「第 7 回川上ダム希少猛禽類保全検討会」が開かれ、江崎委員長は、「川上ダム建設がオオタカなどに与える影響は少ない」と話した（毎日新聞社・地方版／三重）

第 7 回川上ダム希少猛禽類保全検討会（平成 20 年 1 月 24 日）

委員長：江崎 保男（兵庫県立大学自然・環境科学研究所 教授）

委員：菊田浩二（奈良ワシタカ研究会 代表）

武田恵世（（財）日本野鳥の会三重県支部）

主な議事：（2）川上ダムの新計画の概要（3）調査結果と影響予測について（平成17～19年の猛禽類調査の結果と、これまでの調査結果に基づき実施した事業による影響予測について報告）①オオタカ ②その他の希少猛禽類（4）希少猛禽類保全対策及び今後の調査計画(案)について（これまでに実施した希少猛禽類の保全対策、平成20年の希少猛禽類の調査計画（案）について報告）

●第12回川上ダムオオサンショウウオ調査・保全検討委員会（平成20年2月25日）

第12回川上ダムオオサンショウウオ調査・保全検討委員会（平成20年2月25日）

委員長：松井 正文〔京都大学大学院 人間・環境学研究科 教授〕

委員：富田 靖男〔元三重県立博物館 館長〕

松尾 直規〔中部大学 工学部都市建設工学科 教授〕

松月 茂明〔元日本サンショウウオセンター 学芸員〕

森下 郁子〔元大阪産業大学 人間環境学部都市環境学科 教授〕

桜井 力〔国土交通省近畿地方整備局木津川上流河川事務所長〕

宮崎 純則〔三重県県土整備部流域整備分野 総括室長〕〔欠席〕

委員会の開催に先立ち、平成20年度の調査予定箇所である、オオサンショウウオの移動障害となっている河川横断構造物を昇降できる施設（オオサンショウウオ道）の試験箇所や、保全対策の一環として、検討しているオオサンショウウオの移転候補地等の現地視察を行いました。委員会では、オオサンショウウオの生息密度を詳細に把握するために、限定した調査範囲で集中的に実施した成体の生息確認調査の結果や、本種の遡上の障害となる堰を想定したオオサンショウウオ保護池での遡上能力試験の結果や、施工性を向上させ、簡易に設置できる人工巣穴の検討結果などを事務局から報告し、また、これらの結果を踏まえて立案した「平成20年度調査および検討の計画（案）」について審議していただきました。委員からは、遡上路の様々な条件で実施した遡上能力試験により、左岸または右岸に接するように設置した斜路構造の遡上路に水を流した場合の遡上数が最も多いことが確認できた貴重な成果であるという意見や、平成20年度調査・検討計画については、保全対策の実施時期および事業計画の工程と照らし合わせた中・長期的な調査計画を示すこと等の指摘がありました。川上ダムでは、今後も、委員会の指導・助言を得て調査や保全対策の検討を実施し、効率的かつ効果的なオオサンショウウオの保全に努めていきます。

- 川上ダム建設に伴う自然環境保全の在り方について審議する第6回委員会が17日あり、事務局の水資源機構川上ダム建設所が、水質保全策や動植物調査の結果や実施計画などを説明した（2008.3.18 中日新聞社・朝刊）

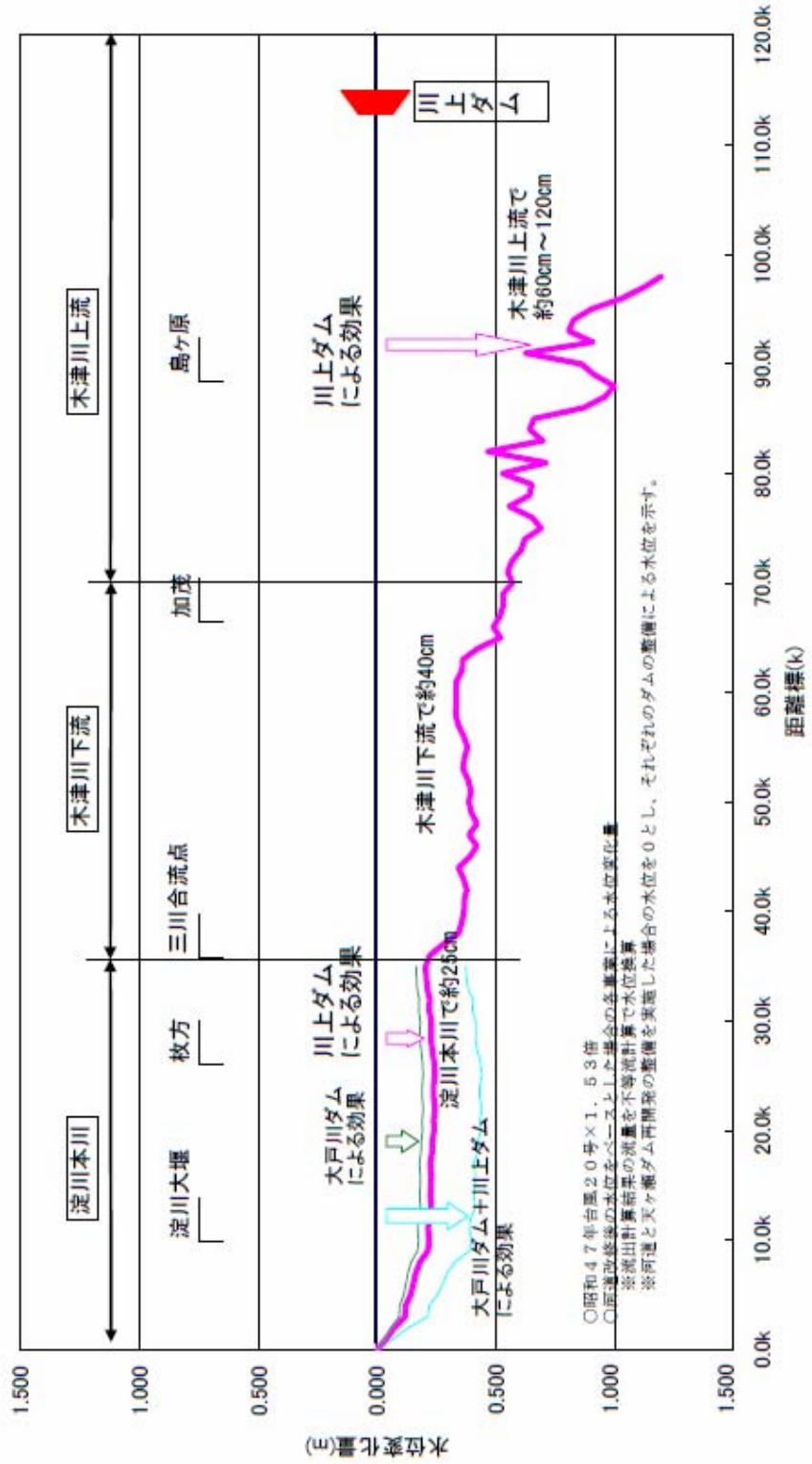
異常流況対策（気候変動対策容量）：

大戸川ダム、丹生ダムに対しても同様であるが、地球温暖化に伴う気候変動の影響への適応策として、気候変動対策容量を考え、国策としてその容量確保に努められたい。

（以上）

添付図1 3月11日第74回審議参考資料1

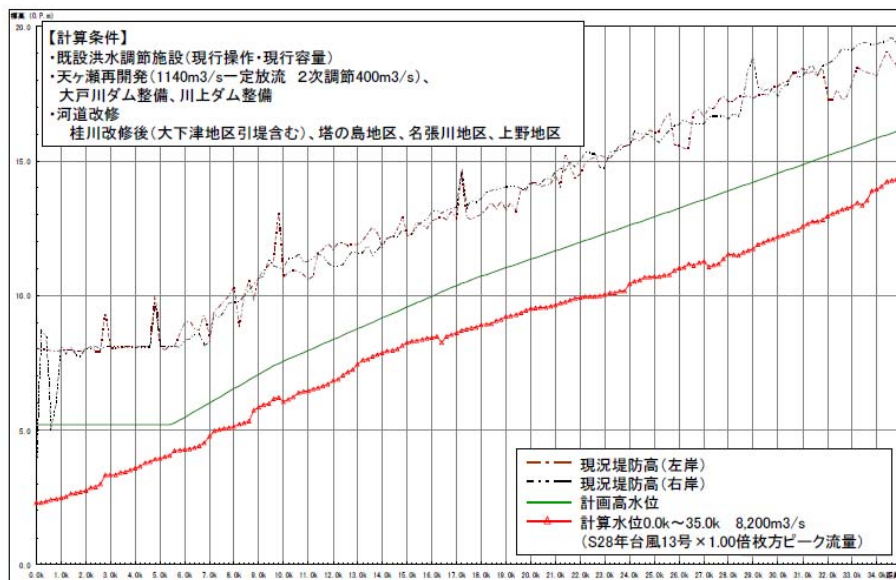
川上ダムによる水位低下は、川上ダム直下流から河口まで約110kmにわたり効果を発揮する



添付図2 12月26日第69回審議資料1-4

P 2 8 下段

淀川水位縦断図(河道改修+天ヶ瀬ダム再開発
+大戸川ダム+川上ダム後)



P 2 9 下段

木津川水位縦断図(河道改修+天ヶ瀬ダム再開
発+大戸川ダム+川上ダム後)

